

「ひきこもり、を理解しよう。パート4

地域共生フォーラム プラットフォーム Koka 2023 に出かけよう!

懐かしい未来新聞

だれひとり取り残さないくみづくりは、市民も当事者も支援者も行政も一緒に集って、多様な考え方を認め合うことから始まります。今回、認め合い、対話する場のひとつとして、地域共生フォーラム(プラットフォームKoka)を開催します。

講演会の他には、女性活躍推進室よりスタートアップの活動団体によるマルシェや閉庁二時間前メンバーのカフェがあります。講演会のみ事前予約をお願いいたします。
●申し込みは、QRコードが便利です。
●講師の紹介
山下耕平(やましたこうへい)氏
大学を中退後、フリースクール「東京シユースタッフ」を経て、『不登校新聞』編集長を創刊から8年間務める。大阪で「フリースクール・フォロ」を立ち上げ、現在副代表理事。同法人で開いている18歳以上を対象にした「なるにわ」のコーディネーター。



申込はここ

**地域共生フォーラム
プラットフォームKoka2023
講演会&イベント**

11.25(土)
12:30-16:00
※講演会は13:30-15:30

参加無料

講師：NPO法人フォロ 山下耕平さん
〈手話通訳・要約筆記あります〉

異論・反響あり

ひきこもり支援のゴールは、社会参加ですか?

前号は、支援者が4つのステージごとに、どのように関わるのかをお示しました。そのなかで、「ステージを上がらなければいけないのか」「まるで、ひきこもっていることは、悪いことかのような」といった意見をいただきました。これは、甲賀市におけるひきこもり支援を再考する良い機会です。

見直し版 ひきこもり支援の視点

「ひきこもり」という状態を否定しない姿勢。ゴールとして就職や社会参加を強要しない考え方

その人らしさを大切に
社会とのつながり方を一緒に考える。

- ★段階的な社会参加
その人に合った社会参加をめざす
- ★中間的な集団への参加
家庭以外で安心できる場を得る
- ★本人へのアプローチ
家族以外の人(相談員など)との関係構築
- ★家族へのアプローチ
家族だけで抱え込まない、適切な対応方法を知る

友人・地域の力
みんなで支援
専門家の力

本号の紙面
★共生フォーラムへ行こう
★見直し版 ひきこもり支援の視点
★コラム★新しい仲間紹介
★遠隔相談パソコン貸出し中
★重層物語 シーズン3 後編

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1356
0748-69-2155

ご利用ください 遠隔相談PC貸出中

人前に行くのが苦手な方も、Google meetで相談したり、会議に参加したりコミュニケーションツールとしてご利用いただけます。PCを持って、ご自宅に行くことが、出会いのきっかけにもなります。詳しくは地域共生社会推進課までお問い合わせください。

NOTHING ABOUT US WITHOUT US

わたしたちのことを、わたしたち抜きで決めないで



介護福祉士
山口 路子さん
(やまぐち みちこ)

●担当業務
抱え上げない介護
福祉介護人材育成
100歳大学支援
居場所づくり支援



理学療法士
葛迫 剛さん
(かつらざこ つよし)

新しい仲間だよ。よろしくね!

●担当業務
地域リハビリ事業全般
(事業所・専門職マネジメント支援)
COPD予防事業

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあつたのではないかと気づきから使われはじめた言葉です。

私には、世間では「ひきこもり」とされる20年間の友人がいます。彼女は小学校から不登校で、「ギターをやってみよう」といって本人の思いからつなげたのがきっかけでした。彼女とはずっと、地域の懇談会を中心に、保育園、隣保館などで人権ライブをしてきました。(ユニット名は彼女の発案で「思考咲悟(しこうさくご)」と言います。とても素敵ですよ)そこで彼女は歌とギター演奏は勿論、

コラム

「ひきこもり」は、誰のための言葉? 多機関協働事業者 引田 幸男

自身の不登校経験や人権について話してきました。元々「ひきこもり」という言葉は、その本人や家族から生まれた言葉ではありません。彼女のとなりを知らなければ知るほど、彼

女について「ひきこもり」という言葉は自分の中でほとんど意味をなさなくなっています。でも、彼女のことや活動を他者に伝える時どう言おうか、そんな話を彼女とした時、開口一番「自分を紹介するの」「ひきこもり」という言葉を使ってもらって構わない。あくまで説明のための言葉でしかないから」との弁。天晴です。

うまくいき過ぎた重層物語 SEASON 3 後編

9月号に引き続き、『ある対話から未来へ』と題して重層物語をお届けします。
地域共生社会を理解する助けになれば幸いです。

【前号までのあらすじ】

「生活が苦しいのに、なぜ臨時給付金の対象にならないのか」と、窓口にやってきた共田さん。応対する生駒主査は、今の社会保障のあり方に未来はあるのだろうかと悩みます。二人は対話を重ね、「支える側と支えられる側を制度の基準値でバツサリ切り分ける制度設計に苦心するよりも、一人の生きづらさをわかり合う努力を選んだのです。

【登場人物】

○共田（ともだ）さん… 67歳：妻（59）と娘（28）と3人で暮らしています。現役の頃には、建設業でバリバリと働いていましたが、50歳を過ぎた頃に精神的な不調によって、うまく会社に復帰できぬまま早期退職しました。現在は工場の夜間警備（週2回）で得た収入と年金で生計を立てています。

○生駒（いこま）主査… 39歳 市役所職員。福祉部局に異動となり5年目。窓口対応や相談業務をしており、ややストレートな物言いでもトラブルになってしまうこともありましたが、相手の話を傾聴し、しっかりとした説明責任を果たすことをモットーに日々業務にあたっています。

共田さんから暮らしの困りごとを聞き取り、その情報をもとに庁内で支援会議を開催しました。会議では、共田さん世帯には自立していく力があるが、それが今は弱くなっている。課題解決を急ぐよりも、生活支援課の相談員と一緒に考え、伴走していく方針を立てました。

生駒主査は共田さんに連絡し、支援会議の結果を伝え、相談員を紹介したのです。

それから3カ月が経ったある日。



「生駒君やないか」

市役所の玄関先で、生駒主査は呼びとめられました。

「ワシや。忙し過ぎて忘れたんか」

「あー、共田さんじゃないですかあ」

「覚えてましたか」

「もちろんです。お元氣ですかね」

「今日はな。いつも世話になってる相談員さんと面談があつて来たんやけど、あなたにもお礼言わなあかんと思つてん。ちよつとかまへんか」

「もちろんです。どこか座りますか？」

「いやいや立ち話でかまへん、すぐに終わるから」

「分かりました」

「あれからな、相談員さんに丁寧に話聞いてもらつて、フードバンクを利用させてもらてるねん」

「なんだか良いお話が聞けそうですかね」

「そつや。そんでな、フードバンクを利用してから思わん展開になつてな」

「共田さんの好物の食材でもあつたんか」

「そんなしよもないことちがう。実はなあ。ワシは不眠で、嫁さんは腰痛やろ。フードバンクにもらいたのがきつかったもんやから、娘に無理言つて取りに行つてもらてんわ。娘も最初は渋々やつたけどな」

「なるほど、フードバンクに娘さんの好物が」

「ちやうわ。一旦、好物から離れてくれ。娘がな、取りに行きよつた時に、そこのボランティアさんがやつてはる学習支援があつてな。ひよんなことからそつを娘が手伝つたやつになつたらしく、毎週取り出されとるんや」

「強気にスカウトする方があつてこにはおられますから。感度の良いセンサーをお持ちの方ですか」

「そんでな、娘もまんざらやない様子になつてな。今では、福祉の仕事に興味もつて、何ぞ知らんけど資格の勉強まで始めよつてな。それ見て嫁さんも嬉しそつにしようや」

「共田さんも嬉しそつに見えますよ」

「まあそつやな。この前なんか、フードバンクに行くのに、嫁さんが娘に土産物のそつめん持たしたつたで」

「バンクする側じゃないですか」

「ほんまやで」

「安心しました。以前より経済的にも少し落ち着きましたか？」

「いやそれがなあ。前より厳しいかもしれんわ」

「どついつことですか？」

「世の中、電気代も高騰、物価も高騰や」

「確かにそつでな」

「それだけやないで。娘は資格の参考書を何冊も買つて、嫁さんは学習支援の子どもが使つ雑巾やら給食袋やらの材料買つてな。相談員さんも苦しいしとつたわ」

「不思議ですね。以前より暮らし向きは良くなつてきている様子なのに」

「そつやな。不思議やな。まあ、経済的には多少苦しくなつたけども、色んな人に出会わせてもらつて機嫌よつ暮らしつてますわ」

「お金は減つても、つながりは増えた……」。ひよつとすると、お金よりもつながりが困窮から抜け出す道なかもかもしれませんね」

「そつかもしれんな。家族三人、安い鍋囲んでやつとります」

「なるほど、鍋が好物やつたんですか」

「もつええて。いや、でもなあ、みんなでつづく鍋が好物やつたんやろな。ほな時間やで行きますわ」

手をあげて、面談に向かうとした共田さんが、伝えられたことがあるように立ち止まりました。

「生駒君。そやけどなんで、あの時、ワシの困りごとをじっくり聞いてくれたんや」

「それは、他人事ではなかつたからですよ」

「いやいや、最初は他人やんか」

「なんと言いますか、私の身内も生きづらさを抱えていまして、毎日踏ん張つてる姿見てるんで。だから、他人事ではないです」

「そつか、自分からもんやな。そら、みんな色々あるわな」

「それに、私自身も結構踏ん張つてるんです。お前は空気が読めんんや、よく言われますし」

「生駒君かか？ そんなもん気にしたらあかん。ワシはあなたの真つ直ぐなご好きやで」

「ありがとつございます」

「ワシなあ。ワシも今やつたらなあ、あなたの言つてた自分の身の回りがら共生社会を始めるつていうことが、腹でわかる」

「半徑3メートルから始めたやつですわ」

「そんなもん、今は3メートルちがうで。ワシと嫁と娘を合わせて、半徑9メートルやで」

「また、広がつたじゃないですか。まあ、私は半徑3キロメートルですけど」

「また大きいこと言つて（笑）」

『人間の弱さは、それを知っている人たちよりは、それを知らない人たちにおいて、ずつとよく現れている』パスカルの著書『パンセ』より

（作・中井 浩喜）